

運動の得意苦手，好き嫌いによる 楽しさを感じる瞬間の違い

～運動があまり得意でない児童の心理特性～

中野 貴博

1. 運動，体力への意識変化と環境設定の重要性

冒頭，今の子ども達が運動や体力に対してどのような意識をもっているかを，いくつかの調査結果などを踏まえながら示したいと思う。

まず，小学生が体育授業を好きと回答する割合について，筆者らが2008年に6,000人以上の小学生を対象に行った調査結果を示す(図1)。1年生が最も高い割合を示し，学年が進むにつれて，子ども達が体育の授業を楽しみと感じなくなっていくことが確認できる。同様に，2015年度のスポーツ庁の全国体力・運動能力，運動習慣等調査¹⁾の結果においても，小学5年生の男子では72.7%，女子では59.4%が体育の授業は楽しいと答えているが，中学2年生になると，それぞれ，49.6%と38.5%に低下する。やはり，学年が進むにつれて体育授業に対する楽しさは薄れていくことが確認できる。これらの結果は，あくまで体育の授業に対する回答であるが，運動全体で捉えても大きな違いはないものと思われる。さらに，これらの結果からは，学年進行に伴い，運動・スポーツが専門化していき，自分の専門種目以外は楽しくない，あるいは，自らの体力や競技水準が高水準にない児童生徒においては，運動離れが進行し，二極化傾向になっていく様子を垣間見ることができる。

だからこそ，われわれ専門家や子ども達の運動や教育にかかわる大人たちは，体力や競技水準の

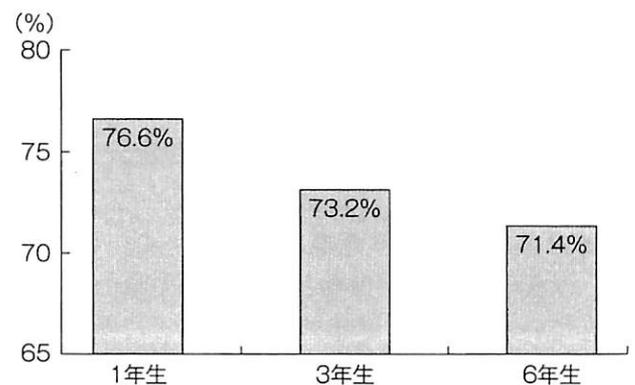


図1 体育の授業が楽しいと答える児童の学年変化(中野, 2016²⁾より引用改変)

高い一部の児童生徒だけではなく，広く子ども達すべてが運動の楽しさを楽しみ，生涯にわたって運動を継続していけるような意識や環境，教育を提供していかなければならない。

このような背景を踏まえ，本稿では，性，学年や子ども達の体力，運動能力，得意，苦手意識の違いにより，運動の楽しさを感じる場面がどのように違うのかを調査結果より検討し，今後の運動指導場面における環境設定や，指導時における配慮につなげることができればよいと考える。

2. 運動が得意の性・学年別変化

以降，筆者らが2016年度にG県T市内の公立小学校13校の児童5,235名を対象に行った，「子ども達が運動の楽しさを感じる瞬間」に関する調査結果をもとに示す。調査項目は17の運動場面であり，各場面において運動を楽しみと感じるかを5件法(とても楽しい，少し楽しい，どちらで

筆者：名古屋学院大学スポーツ健康学部

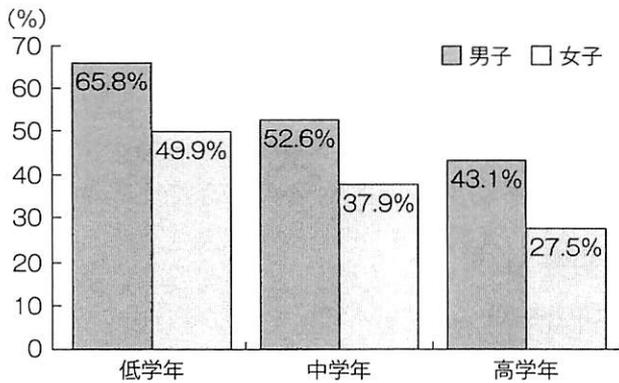


図 2 運動が得意と答える児童の学年変化

もない、あまり楽しくない、まったく楽しくない)により調査した。加えて、運動の得意苦手や体育授業の好き嫌いなどの項目を同時に調査した。

最初に、運動が得意という意識が性、学年でどのように変化しているかを示す。冒頭に、体育授業に対する“好き”の意識は示したが、ここでは、運動自体に対する得意意識を調査した。図 2 は性、学年別の運動が得意と回答した児童の割合を示している。性差、学年差いずれも χ^2 乗検定の結果、有意な差が確認された。男児に比べて女児のほうが 15% 以上、得意と回答する割合が少なく、また、低中高学年へと学年が進むに連れて約 1 割ずつ、得意と回答する割合が減少していた。さまざまな心理的発達の影響や発育発達の違いが低学年よりも高学年のほうが顕著になりやすいなどの影響も考えられるため、単純に割合が低いことが悪いとは言い切れないが、小さい頃から運動に対する得意意識を高めておくことが重要であることは間違いのないように思う。また、得意意識が男女で大きく違うということは、苦手意識も同様の傾向が想定される。高学年ではもちろんだが、低学年でも 15% 以上の差がみられることより、男女同時の運動実施や場面設定に関しては、注意が必要であることが示唆される。仮に配慮を怠れば、性差の意識の低い低学年時に女児がより強く苦手意識をもってしまうことも懸念される。

3. 児童が運動の楽しさを感じる瞬間

続いて、「子ども達が運動の楽しさを感じる瞬間」に関する 17 の調査項目において“とても楽しい”と回答した割合を全体および学年別に示す(表

1)。表 1 は、全体の回答割合が多かった順に並べてある。「運動やスポーツで勝負に勝ったとき」が最も高い割合を示し、全体では 79.8% の児童がとても楽しい瞬間であると回答していた。続いて、「上手に運動やスポーツができたとき」、「上手にできたことを先生や友だちにほめられたとき」、「みんなで運動やスポーツをしているとき」の順であり、これらの 4 項目では、どの学年においても 6 割以上の児童が、“とても楽しい”と回答していた。やはり、どの学年においても、勝負に勝ったときや上手にできたとき、それを褒めてもらったとき、そして、みんなで運動をしているときは、とても楽しいと感じていることがわかる。

一方で、われわれが注視しなければならないのは、回答割合が低い瞬間である。「運動やスポーツで勝負に負けたとき」「なかなか上手に運動やスポーツができないとき」「上手にできないことを先生や友だちに注意されたとき」の 3 項目が下位 3 つとなっている。特に、最下位の「上手にできないことを先生や友だちに注意されたとき」に関しては、心ない一言や対応が、子ども達の運動の楽しさを奪ってしまうことを示すものであり、気をつけなければならない。

加えて、網かけや二重下線で示した 4 つの項目では、学年間で順位の変動がみられている。「年上のお兄さんお姉さんと運動やスポーツをしているとき」と「先生などに運動やスポーツを教えてもらっているとき」の 2 項目に関しては、低学年では上位になっているが、高学年では下位になっている。低学年では、先生や年上のお兄さんお姉さんと一緒に運動をしたり、教えてもらったりすることに喜びを感じている一方で、高学年では、そのようなことはあまり求めていないと解釈することができる。また、高学年では、勝ち負けのつくスポーツのほうが楽しい傾向がみられる一方で、過剰な勝ち負け意識は好ましくない様子も観察され、競争場面や環境の設定に注意が必要であることが示唆される。詳しくは後述するが、この項目に関しては、運動の得意苦手や好き嫌いでの差も大きく、注意が必要といえる。

全体の回答割合をみると、高学年のほうが低学年に比べて明らかに“とても楽しい”の選択割合が低いことがみてとれる。学年が進むにつれて運

表 1 運動が“とても楽しい”と回答した割合の変化

項目	とても楽しい割合 (順位)			
	全体	低学年	中学年	高学年
運動やスポーツで勝負に勝ったとき	79.8% (1)	82.4% (1)	81.3% (2)	76.1% (2)
上手に運動やスポーツができたとき	78.9% (2)	78.8% (3)	81.4% (1)	76.5% (1)
上手にできたことを先生や友だちにほめられたとき	72.7% (3)	81.3% (2)	77.2% (3)	61.0% (4)
みんなで運動やスポーツをしているとき	67.9% (4)	71.2% (4)	68.1% (4)	64.9% (3)
上手な人と運動やスポーツをしているとき	60.2% (5)	68.8% (5)	61.9% (5)	51.3% (6)
運動やスポーツでたくさん汗をかいたとき	56.3% (6)	58.9% (9)	59.9% (6)	50.6% (7)
年上のお兄さんお姉さんと運動やスポーツをしているとき	55.6% (7)	<u>66.7% (6)</u>	59.2% (7)	42.8% (9)
勝ち負けのつく運動やスポーツをしているとき	55.1% (8)	59.4% (8)	54.9% (8)	<u>51.7% (5)</u>
先生などに運動やスポーツを教わってもらっているとき	51.4% (9)	<u>64.2% (7)</u>	54.1% (9)	<u>37.8% (10)</u>
あまり勝ち負けを気にしない人と運動やスポーツをしているとき	48.6% (10)	50.4% (10)	47.0% (10)	<u>48.7% (8)</u>
しんどくて疲れる運動やスポーツをしているとき	31.0% (11)	37.8% (11)	29.7% (11)	26.5% (11)
勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき	25.4% (12)	34.5% (12)	21.1% (12)	22.0% (12)
1人で運動やスポーツをしているとき	22.1% (13)	30.6% (13)	19.4% (13)	17.5% (14)
上手でない人と運動やスポーツをしているとき	21.0% (14)	27.2% (14)	17.1% (14)	19.6% (13)
運動やスポーツで勝負に負けたとき	12.5% (15)	19.1% (15)	10.0% (15)	9.3% (15)
なかなか上手に運動やスポーツができないとき	10.6% (16)	20.1% (16)	7.5% (16)	5.6% (16)
上手にできないことを先生や友だちに注意されたとき	7.7% (17)	13.4% (17)	6.2% (17)	4.3% (17)

二重下線：順位が上がる項目、網かけ：順位が下がる項目

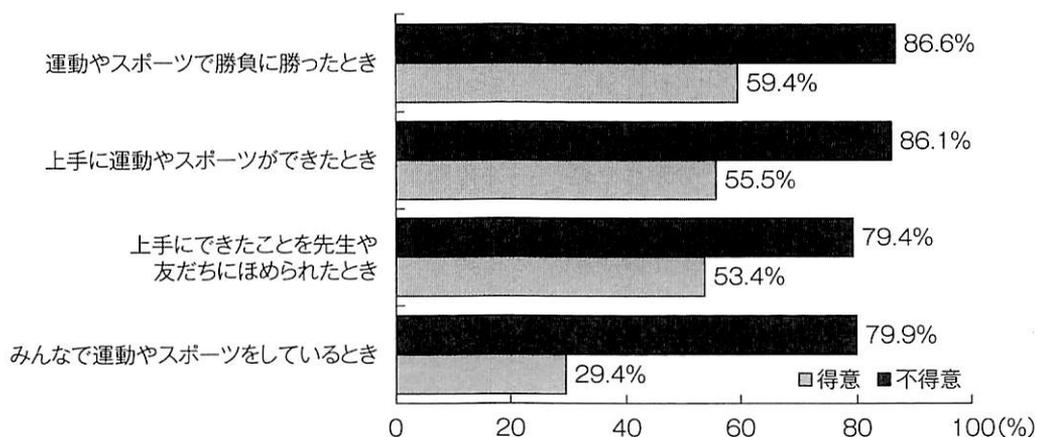


図 3 運動の得意苦手による運動が楽しい場面の違い (上位 4 項目)

動への意識の二極化も進むことが推察され、指導や教育にあたる大人は、子ども達の多様な運動意識を理解する必要があると思われる。少しでも多くの児童が運動を楽しみ感じる瞬間を提供できるような配慮が、益々必要になるであろう。

4. 運動の得意苦手による楽しさを感じる瞬間の違い

ここからは、運動の得意苦手や好き嫌いにより、楽しさを感じる瞬間にどのような違いがあるかを

検討していく。最初に、運動の得意苦手による違いを示す。

前節で示した、楽しいと感じる場面の上位 4 項目の結果を図 3 に示す。「運動やスポーツで勝負に勝ったとき」「上手に運動やスポーツができたとき」「上手にできたことを先生や友だちにほめられたとき」の 3 項目は全体での傾向と類似していたが、やはり不得意群においては“とても楽しい”と回答する割合が 20~25% 程度低下していた。さらに、「みんなで運動やスポーツをしているとき」という項目においては顕著な違いが確認

表 2 得意群と不得意群における“楽しさを感じる瞬間”の全 17 項目の順位変化

項目	とても楽しい割合 (順位)		
	全体	得意	不得意
運動やスポーツで勝負に勝ったとき	1 位	1 位 ⇒	2 位
上手に運動やスポーツができたとき	2 位	2 位 ⇒	1 位
上手にできたことを先生や友だちにほめられたとき	3 位	4 位 ⇒	3 位
みんなで運動やスポーツをしているとき	4 位	3 位 ⇒	8 位
上手な人と運動やスポーツをしているとき	5 位	5 位 ⇒	9 位
運動やスポーツでたくさん汗をかいたとき	6 位	6 位 =	6 位
年上のお兄さんお姉さんと運動やスポーツをしているとき	7 位	7 位 ⇒	5 位
勝ち負けのつく運動やスポーツをしているとき	8 位	8 位 ⇒	10 位
先生などに運動やスポーツを教えてもらっているとき	9 位	9 位 ⇒	7 位
あまり勝ち負けを気にしない人と運動やスポーツをしているとき	10 位	10 位 ⇒	4 位
しんどくて疲れる運動やスポーツをしているとき	11 位	11 位 ⇒	12 位
勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき	12 位	12 位 ⇒	14 位
1人で運動やスポーツをしているとき	13 位	13 位 =	13 位
上手でない人と運動やスポーツをしているとき	14 位	14 位 ⇒	11 位
運動やスポーツで勝負に負けるとき	15 位	15 位 =	15 位
なかなか上手に運動やスポーツができないとき	16 位	16 位 =	16 位
上手にできないことを先生や友だちに注意されたとき	17 位	17 位 =	17 位

された。得意群では 79.9% の児童が“とても楽しい”と回答し、全項目のなかで 3 番目に高い割合であった。しかし、不得意群においてはわずか 29.4% であり、全項目中の 8 番目であった。あまり運動が得意でない児童においては、大勢と一緒に運動をする環境は苦手意識を助長される場であり、友だちに対する引け目や申し訳なさを感じてしまっているのかもしれない。

表 2 に得意群と不得意群での“楽しさを感じる瞬間”の全 17 項目の順位変化を示す。不得意群では、「上手な人と運動やスポーツをしているとき」や「勝ち負けのつく運動やスポーツをしているとき」「勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき」に楽しさをあまり感じるができない傾向が確認され、この結果からも、明確な勝敗や過剰な勝ち負け意識が不得意群にとっては、よくない影響をおよぼしていることが推察できる。発育発達速度や運動習熟度に応じた指導や環境設定、グループ分けもときには必要であることが示唆される。集団で運動の楽しさを共有する時間とともに、あまり運動が得意でない児童に対しては、目標設定を変えた集団の設定や、個人練習による底上げなどの配慮も必要であると考えられる。

5. 運動の好き嫌いによる楽しさを感じる瞬間の違い

最後に、運動の好き嫌いにより、楽しさを感じる瞬間にどのような違いがあるかを検討する。ここでは、小学校 5, 6 年生のみを対象にした結果である。

始めに、性別による運動の好き嫌いに関しては、好きの割合が男児で 81.9%、女児で 69.1% であり、嫌いの割合はそれぞれ 6.4% と 14.4% であった。全体として男児のほうが 1 割程度、運動に対する嗜好性が強いと考えられる。前節では、運動の得意苦手であったが、運動の好き嫌いにおいても類似の傾向が確認された。

そこで、特徴的な結果が確認された「みんなで運動やスポーツをしているとき」「上手な人と運動やスポーツをしているとき」「勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき」の 3 つの結果を表 3~5 に示す。いずれの項目も、運動が好きな児童と嫌いな児童で大きく回答割合に違いがみられる。「勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき」においては、運動が嫌いな児童では、“とても楽しい”と回答した割合はわずかに 3.1% であり、90% 以上の児童が“どち

表 3 運動の好きな児童と嫌いな児童における「みんなで運動やスポーツをしているとき」に楽しさを感じる割合の違い

	とても 楽しい	少し 楽しい	どちらで もない	あまり 楽しく ない	まったく 楽しく ない	合計
好き	78.5%	18.8%	1.7%	0.9%	0.1%	100%
どちらでもない	30.6%	42.2%	22.1%	4.3%	0.8%	100%
嫌い	12.5%	29.7%	27.1%	21.9%	8.9%	100%
全体	64.9%	23.2%	7.2%	3.5%	1.1%	100%

χ^2 検定：p値<0.05

表 5 運動の好きな児童と嫌いな児童における「勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき」に楽しさを感じる割合の違い

	とても 楽しい	少し 楽しい	どちらで もない	あまり 楽しく ない	まったく 楽しく ない	合計
好き	27.2%	17.0%	17.5%	21.5%	16.8%	100%
どちらでもない	8.6%	9.4%	29.7%	28.9%	23.4%	100%
嫌い	3.1%	4.7%	16.1%	25.5%	50.5%	100%
全体	22.1%	14.6%	19.1%	23.0%	21.3%	100%

χ^2 検定：p値<0.05

らでもない”よりも否定的な回答をしている（表5）。しかしながら、運動が好きな児童の44.2%は肯定的な回答をしており、大きな意識の隔りがある。運動が嫌いな児童においては、上手な人と一緒に運動をすることや、みんなと一緒に運動をすることにも抵抗を感じていることが推察され、このような意識が明確になってくる中学年から高学年頃には、集団設定やチーム分けなどの場面で多くの配慮をしなければならないと考える。高学年とはいえ若い児童であり、この時期に運動自体への嫌悪感を助長してしまうような環境設定や、課題設定は絶対にすべきではないといえる。

6. まとめ

全体を通して、性別や学年によって運動に対する意識には大きな変化があることが確認された。低学年では、年上のお兄さんお姉さんや先生などに運動やスポーツを教えてもらっているときに楽しさを感じるが、高学年ではそのような傾向はな

表 4 運動の好きな児童と嫌いな児童における「上手な人と運動やスポーツをしているとき」に楽しさを感じる割合の違い

	とても 楽しい	少し 楽しい	どちらで もない	あまり 楽しく ない	まったく 楽しく ない	合計
好き	61.8%	20.6%	10.1%	4.7%	2.8%	100%
どちらでもない	25.5%	24.3%	32.8%	12.7%	4.6%	100%
嫌い	11.5%	18.2%	28.1%	17.2%	25.0%	100%
全体	51.3%	20.9%	15.2%	7.2%	5.4%	100%

χ^2 検定：p値<0.05

く、むしろ勝ち負けのつくスポーツのほうが楽しい傾向がみられた。しかしながら、過剰な勝ち負けには嫌悪感もみられ、この時期の競争や環境の設定には注意が必要であろう。

さらに、運動が得意な児童と苦手な児童、好きな児童と嫌いな児童では、決定的に運動が楽しいと感じる場面に違いがあることも確認された。運動が得意や好きな児童においては、細かな指導よりも競争場面やみんなで実施することに楽しさを感じる傾向が観察された。一方で、運動が苦手やあまり好きではない児童においては、教えてもらうことに楽しさを感じている様子がみられるが、上手な人と一緒に運動をすることや、みんなと一緒に運動をすることに抵抗を感じており、過剰な勝ち負け意識は、そのような抵抗感を助長してしまう可能性が示された。

身体の発育や体力・運動能力の発達が一律ではない子ども達に対することは容易ではない。多くの教科でも実施されているように、運動や体育場面においても、発育発達の速度や運動習熟度に応じた指導や環境設定、グループ分けはときに必要であり、生涯における運動への志向を高めるためには有効であると考えられる。

文 献

- 1) スポーツ庁：平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書。p139, p173, 2015.
- 2) 中野貴博：今の子どもたちの発育発達を考慮した運動指導の在り方。コーチング・クリニック, 30(12)：64-67, 2016.